

「新しい生活」の奇妙さ

安河内宏法（京都工芸繊維大学美術工芸資料館）

決定的瞬間は、時間に裂け目を作る。戻ることは出来ないと知りながらも、人はその瞬間を記憶し続け、再び体験することを望む。それがのっぺりと続く生活に意味を与えるからである。たとえば評論家シュテファン・ツヴァイクは、天才的な芸術家の靈感が人類の徑路に不帰の点を刻むほどの作品を生み出す決定的瞬間を「人類の星の時間」と名付けた。「芸術の中に一つの天才精神が生きると、その精神は多くの時代を超えて生きつづける。世界歴史にもそのような時間が現われ出ると、その時間が数十年、数百年のための決定をする。そんなばあいには、避雷針の先端に大気全体の電気が集中するように、多くの事象の、測り知れない充満が、きわめて短い瞬時の中に集積される」。

むろん「人類の星の時間」を生きる幸運に与ることのできる芸術家は、一握りしかいない。だが芸術家であれば誰しも、その人個人にとっての、あるいは制作中の作品にとっての「星の時間」を夢見る。芸術家の靈感や技能と素材とが結びつき、作品が完全なるものとして眼前に現れる瞬間。芸術的努力は、その瞬間に向けて重ねられる。

しかし、香川裕樹の場合はいささか事情が異なっている。彼はこれまで、日常的に拾集・購入している日用品や玩具などを組み合わせ、立体作品を制作してきた。それらは、手術台の上でこうもり傘とミシンを出会わせたシュールレアリストたちのように、偶発性をもたらす衝撃的な出会いを目指して作られるものではない。そもそも香川が作品の素材として選ぶ物は、彼の審美眼に従って選ばれているため、はじめからゆるやかなつながりを持つ。香川はそうした物を積み木で遊ぶ子どものように組み合わせ、彼自身が納得出来る物同士の結びつきを探る。たとえばピラミッド型の置物と犬の柄のコップとが結びつけられるとき、それは確かに不思議で滑稽でさえあるものの、彼がそこに美を見出しているとは思えない。香川が作品制作中に「この状態は決まりすぎている」とたびたび口にすることを考えるのなら、彼は「星の時間」を忌避する芸術家であろうとしているようにさえ、感じられる。

本展「新しい生活」において、香川のこうした態度はこれまで以上にはっきりと現れている。会場に並ぶ夥しい数の写真はいずれも、ホームビデオから静止画として切り出されたものである。それぞれの写真にノスタルジーや素人の手によるビデオ固有のおかしみを、あるいは写真のアトラダムな配置に記憶が攪乱されるような感覚を覚えることはあるのかもしれない。だがここで敢えて断言すれば、香川の写真の魅力は、そこにはない。逆説的な言い方になるが、退屈な写真であるからこそ、それらは魅力的なのだ。そしてそ

うであるがゆえに、それらの写真は「新しい生活」と題された展覧会に並ぶに相応しいのだ。

新しい生活。香川は何も、いまの私たちの生活を作品によって表象しようとするのではない。私たちがふだんから触れている生活に芸術という非日常的な方法によって接近しようとするのが倒錯的であることに、香川は気づいている。だから「新しい」生活なのだ。生活という坦々たる時間。決定的瞬間でも「人類の星の時間」でもない。時が経てば個々人の記憶にも残らない。かといって、そこに写される光景を私たちの生活と無縁だと切り捨てることもできない。このように否定形で語るに相応しい写真群をとおして、香川は、私たちのいまの生活と同一視することも不同のものと見なすことも出来ない、奇妙な「新しい生活」を作り出す。